

短 報

キツネアザミの白花品 (浅井康宏)

Yasuhiro ASAI: A White-Flowered Form of *Hemistepta lyrata* Bunge

我が国へは古い渡来品とされているキツネアザミは、東亜各地の主に人里附近の向陽の低湿地に広く生育する雑草である。

ところで最近、齋藤吉永氏によって本種の白花品が見出された。生育地は埼玉県熊谷市池上の水田地帯の田畔で、通常の桃紫色花をつけるキツネアザミの群落中に点在していたとのことである。

今回の採品は頭花が全く桃紫色を帯びず純白で、すこぶる清楚な感じを与えるが、その他は常品と異ならない。なお本種の白花品についての記録としては、飯沼慾齋：草木図説前篇（草部）巻十五および大正6（1917）年発刊の坂庭清一郎・萱場

柔寿郎：新編植物図説中に、「一種白花のものあり」と簡単に触れているのが見られるにすぎない。これにシロバナキツネアザミ（齋藤）の和名を与え、記載しておくこととしたい。

Hemistepta lyrata Bunge form. *nivea* Asai, f. nov.

Flores albi, cetera ut in typo.

Hab. Japan, Honshu: On sunny wet site of Ikegami, Kumagaya-shi, Saitama Prefecture (Y. Saito, May 7, 1992—Type in TI).

(東京歯科大学)

幻の植物マルバクサイチゴを北陸で発見 (若杉孝生^a, 鳴橋直弘^b)

Takao WAKASUGI and Naohiro NARUHASHI: *Rubus hirsutus* Thunb. f. *simplicifolius* (Makino) Ohwi found in Hokuriku District

マルバクサイチゴは、飯沼慾齋の草木図説5巻98図（北村1977）にマルハイチゴとして出ているもので、1902年牧野富太郎によってクサイチゴの変種として記載発表された（Makino 1902）。和名のマルバクサイチゴは、その後小泉源一（1913）がつけたもので、この名の方が適切なので、後の人はこの和名を使用している。大井次三郎（1953）はこの植物をクサイチゴの品種とした。

この植物の標本を、京都大学理学部植物学教室標本庫、国立科学博物館、東京大学総合研究資料館、および、都立大学牧野標本館で調べたところ、牧野標本館のみに数点所蔵されていた。

牧野の発表時の引用標本は、G. Naguraの三河Kaifukuと牧野の東京での栽培植物である。牧野標本館所蔵のこのNaguraの1895年5月20日採集の栽培植物の標本には、古いラベルが添付しており、それに「富士山産と聞けり」と書かれてい

る。その後、梅村甚太郎著 富士山植物誌（1923）、植松春雄著 山梨の植物誌（1981）、静岡県生物研究会編 静岡県植物誌（1967）、および杉本順一著 静岡県植物誌（1984）を見ても見当たらず、富士山に存在するかどうかは不明である。牧野富太郎の東京での栽培品からの標本を除けば、牧野標本館には、唯一牧野が1913年に豊後で採集した標本がある。しかし、これの詳しい産地は不明であるし、最近出版された新版大分県植物誌（1989）には、マルバクサイチゴは出していない。また、手元にある幾つかの地方植物誌（引用文献では割愛）を調べても、この植物は載っていない。上記のように、マルバクサイチゴは江戸時代より知られていたにもかかわらず、幻の植物として今日にいたっていた。

著者らは、1992年このマルバクサイチゴを福井県丹生郡朝日町の山林で、花期と果実期の2度